

フランス語と日本語における指示と照応 — 談話モデルの観点から —

1. はじめに

談話理解において指示 (*référence*) と照応 (*anaphore*) が重要な役割を果たしていることは誰もが認めるところだろう。指示と照応については過去に膨大な研究の蓄積がある。しかしながら例えば、*Un homme est entré dans la salle d'attente. Il s'est assis à côté d'une vieille dame.* における *un homme* → *il* という代名詞照応を例に取ると、代名詞 *il* は先行詞 *un homme* を「指している」または「受けている」という考え方がいまだに支配的ではないだろうか。このような考え方を代表するのはテキスト言語学の立場を採る Halliday & Hasan (1976) だろう。

Substitution, on the other hand, is a relation within the text. A substitution is a sort of counter which is used in place of the repetition of a particular item. For example, in

[3:1] a. My axe is too blunt. I must get a sharper one.

b. You think Joan already knows? — I think everybody does.

one and *does* are both substitutes : *one* substitutes for *axe*, and *does* for *knows*. And whereas in reference there is no implication that the presupposed item could itself have figured in the text, and in many instances we know it could not have done, this IS implied in the case of substitution. Thus, in [3:1 a and b] it would be entirely possible to 'replace' *one* by *axe* and *does* by *knows*. (Halliday & Hasan 1976)

照応過程を「代用」(substitution) と呼ぶ Halliday & Hasan は、例文 [3:1 a] で *one* を *axe* で置き換えることができ、[3:1 b] では *does* を *knows* で置き換えられると述べている。言うまでもなくここで著者たちの念頭にあるのは逆の操作で、不定代名詞 *one* は *axe* の代用で、動詞句照応形 *does* は *knows* の代用だと考えているのである。「代用」という概念は、照応過程を単語と単語の関係だと見なしていることを示している。

ところがこのような見方では説明できない現象がたくさんあることも知られている。

(1) The car came racing round the corner although the lights were on red. I suppose *he* must have overlooked them. (Bosch 1983)

(2) [メガネ店の張り紙] Si vous trouvez moins cher, je *les* casse. (Cornish 1999)

(3) one had a uh ... I don't know what you call *them*, but *it's* a paddle, and a ball ... is attached to the paddle, and you know you bounce *it*. (Chafe 1980)

(4) A German shepherd bit me yesterday. *They* are really vicious beasts. (Nash-Webber 1977)

(1)では代名詞 *he* の先行詞がない。このような場合、*the car* との連想関係で *he* が導出される連想照応と見なされることが多い。しかし、連想照応で用いられる照応形は定名詞句に限られ代名詞は不可だとされるが、(1) ではそれにもかかわらず代名詞が用いられている。(2) は状況から *je casse les prix* 「値引きをする」の *les prix* が代名詞化されていることがわかるが、先行詞がないことには変わりはない。(3) は実験でビデオを見せられた被験者が、見たものを思い出して言語化している例である。*them* には先行詞がなく、おまけに直後に単数形の *it* に置き換えられており、数の揺れが観察される。(4) では *they* の先行詞は *a German shepherd* だと考えられるが、先行詞は単数で照応代名詞は複数で、数が一致していない。これらの例では照応過程を単語と単語の関係という表層の統語的關係と見なすことができないのは明らかである。このような事例は「推論に基づく照応」(*inferential anaphora* cf. Webber 1978) と呼ばれることがあるが、そう呼んだだけでは問題は解決しないので、どのような推論過程がそこにあるかを明らかにしなくてはならない。そのためには一定の理論装置が必要とされる。本稿ではメンタル・スペース理論を改変した談話モデル理論に基づいてこれらの事例を考察する。

なお本稿で考察の及ぶ範囲は3人称代名詞 (*il, ils, elle, elles*)に限定する。指示代名詞 *ce* や中性代名詞 *en, le premier, ce dernier* など照応機能を果たす語は他にもあるが、ここでは考察の対象とはしない。

2. 照応過程と談話情報の累積性

前節で次の例を挙げたが、そもそもこのケースは何の問題もない照応なのだろうか。

(5) *Un homme est entré dans la salle d'attente. Il s'est assis à côté d'une vieille dame.*

Halliday & Hasan 流に代用という考えを単純に適用すると、*il* は *un homme* の代用なのだから、置き換えることができるはずである。

(6) *Un homme est entré dans la salle d'attente. Un homme s'est assis à côté d'une vieille dame.*

ところがこうすると一つ目の *un homme* と二つ目の *un homme* は別の人を指すことになり、(5)とは意味が変わってしまう。この事実は代名詞 *il* が先行詞の単なる代用ではないことを示している。(5)の *il* を何かで置き換えるとすれば、次のようにしなくてはならない。

(7) *Un homme est entré dans la salle d'attente. L'homme (qui est entré dans la salle d'attente) s'est assis à côté d'une vieille dame.*

これなら元の (5) の意味を保持できる。ところが不思議なことに *il* の代わりに納まったのは *l'homme (qui est entré dans la salle d'attente)* という定名詞句である。第1文の不定名詞句 *un homme* はいつの間にか定名詞句に変化している。少し考えれば誰にでもわかるこの問題を正面から取り上げたのは、筆者の知る限り Öim (1973) しかない。

この事実は次のような直感にも合致している。un homme は不定名詞句であり、il は定代名詞である。不定と定が同一指示の関係を結ぶことはありえない。そもそも「不定」とは、ざっくり言えば、「どれ / 誰を指しているのかわからない」という状態で、「定」とは「どれ / 誰を指しているのかわかっている」という状態である。どれを指しているのかわからなければ、そもそも同一指示など成り立つ訳がない。同一指示は定と定の間でなければ成立しない¹。したがって、(7) で il と l'homme (qui est entré dans la salle d'attente) が同一指示というのは、どちらも定なのだから理に叶っている。

それでは (7) ではどうして不定がいつの間にか定に変化したのだろうか。この間に答えるためには談話情報の累積性を考える必要がある。従来の言語研究の大部分は、文を最大の単位とする文・文法 (grammaire de phrase) であるため、文の境界を越える照応過程をうまく扱うことができない。形式意味論の量子子もその作用域は文を越えないので、同じ問題に直面する²。談話を扱う談話文法 (grammaire de discours) は文の境界を越える言語現象を解明しなくてはならない。そこで鍵となる概念が談話情報の累積性である。これはかんたんに言えば、「談話の進行に従って文の表す意味は次々と記録媒体に書き込まれて蓄積されてゆく」ということである。

この概念を次のモデルで説明してみよう。まず3つの文から成るミニ談話を考える。

(8) a. Un homme est entré dans la salle d'attente.

b. Il s'est assis à côté d'une vieille dame.

c. Il portait un pardessus gris.

名詞句によって談話世界 (univers de discours) に導入される指示対象を談話指示子 (discourse referent) と呼ぶ³。第1文によって un homme に対応する談話指示子 a が談話世界に導入される。la salle d'attente は談話の調整作用 (accommodation) によって、談話世界に最初から存在しているものと理解される⁴。この時点で談話世界 (UD) は次のように構成される。

UD1 : [a, b] ただし, a = un homme, b = la salle d'attente

第2文によって une vieille dame の談話指示子 c が導入されると、談話世界は次のようにアップデートされる。

UD2 : [a, b, c] ただし, a = un homme, b = la salle d'attente, c = une vieille dame

¹ Combien de pommes voulez-vous? — J'en voudrais trois. では、先行詞 pommes も代名詞 en も不定なので、不定と不定の間で照応過程が成立しているが、同一指示ではないことに注意されたい。同一指示は外延に関わるが、ここでは内包の同一性だけが成り立っており、しばしば identity of sense anaphora と呼ばれる。

² この課題を解決しようとしたのが動的意味論 (dynamic semantics) だが、一階述語論理と同じように不定名詞句を変数として扱っているため、根本的な解決にはなっていない。

³ discourse referent という用語を初めて用いたのは Karttunen (1976) である。談話指示子は言語外的指示対象ではなく、話し手と聞き手の心の中に構築される実体 (entity) である。

⁴ accommodation については Lewis (1979) を参照。

ここで注意しなくてはならないのは *un homme* に対応する談話指示子 *a* の変化である。文が表す情報は関係する談話指示子にタグとして付加されると考えよう。小包に荷札をくくり付けるように、談話指示子には文が表す意味が書き込まれたタグが次々と付加される。このように考えると、第2文 (8 b) の *il* が表しているのはもはや *un homme* ではない。その談話指示子には、すでに第1文の情報 *x est entré dans la salle d'attente* が書き込まれている。したがって (8 b) で *il* が表しているのは、次の枠内の談話情報全部を総合したものということになる⁵。

<p><i>a = un homme</i> <i>a est entré dans la</i> <i>salle d'attente.</i></p>

しかしこれを言語的に表現しても、*un homme qui est entré dans la salle d'attente* にしかならず、(7) で *il* を置き換えた *l'homme qui est entré dans la salle d'attente* にはならない。談話情報の累積性を実現するためには、情報が付加される指示対象は「定」である必要がある。どれだかわからない指示対象にいくら情報を付加しても、情報はただ分散するだけで累積された情報にはならないからである。ここで次の談話解釈規則を仮定しよう。

談話解釈規則

談話世界に不定名詞句によって導入された談話指示子は、それ以後の談話においては変数ではなく定数として扱われる。

Russell 以来、形式意味論においては伝統的に *un homme* のような不定名詞句は $\exists x$ [*homme(x)*] という変数を含む存在量化表現として扱われて来た。しかし談話理解のプロセスを解明するためには、この規則が示すように定数として扱う必要がある。

これは私たちが物語を理解するときの次のような直感にも合致している。「昔々あるところに、お爺さんとお婆さんが住んでおりました。お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました」という物語の冒頭では、名詞句「お爺さん」「お婆さん」は意味からして不定名詞句であり、その談話指示子は最初に変数として談話世界に登録される。しかし、二度目の「お爺さん」「お婆さん」はもはや不定ではなく定名詞句である。さっき物語に導入した「そのお爺さん」「そ

⁵ 見てすぐにわかるように、これは Kamp & Reyle (1993) の談話表示理論 (Discourse Representation Theory) 風の書き方で、細かい約束事を省略した簡略表記であることを断っておく。談話表示理論は談話情報の累積性を表現できる理論装置である。ただし、談話表示理論において照応は、変数と変数の同一関係と見なされており、その点で本稿の立場とは異なる。

のお婆さん」であり、どこの誰でもかまわない不定のお爺さん・お婆さんではない。このことは、不定（すなわち変数）として談話世界に導入された談話指示子は、それ以後、定として扱われることを示している。

(8) のミニ談話に戻る。(8 c) *Il portait un pardessus gris.*では新たに談話指示子 *d = un pardessus gris* が導入されるが、それはさておき重要なのは主語 *il* の変化である。(8 a)の *un homme* は (8 b)では *il = l'homme qui est entré dans la salle d'attente* へとアップデートされた。同じ談話指示子は (8 c)において、*il = l'homme qui est entré dans la salle d'attente et qui s'est assis à côté d'une vieille femme* へとアップデートされねばならない⁶。

3. 談話理解の心的モデル：談話モデル理論

前節でその概要を見た談話情報の累積性をモデル化するために、談話モデル (*modèle du discours*) という理論装置を考える。詳細については東郷 (1999, 2000, 2001, 2002)を参照していただきたい。概要は次のとおりである。

談話モデルとは *Fauconnier* のメンタル・スペース理論に基づく談話理解のための心的モデルであり、共有知識領域・発話状況領域・言語文脈領域の3つの下位領域で構成される。共有知識領域はさらに百科事典的知識領域とエピソード記憶領域に分割される。

百科事典的知識領域には、私たちが世界について持っている知識とそれにまつわる談話指示子が登録されている。

(9) a. *Christophe Colomb découvrit l'Amérique en 1492.*

b. *Le chat est carnivore.*

この領域には *Christophe Colomb* や *l'Amérique* のような固有名、*le chat* のような類名と、それに関する情報が登録される。エピソード記憶領域はより個人的で、話し手の生活圏に属する事物や友人・知人、また個人的体験情報が登録される。

(10) a. *Paul m'a téléphoné hier soir.*

b. *Tu te souviens du restaurant où nous sommes allés la semaine dernière ?*

エピソード記憶領域は *Paul* のような固有名、「先週いっしょに行ったレストラン」などの体験的情報を収める領域であり、百科辞典的知識領域よりも局所的で流動的な記憶領域である。

発話状況領域は発話の場の心的表示であり、ここにはデフォルトで話し手と聞き手、および発話の場に知覚可能な事物が登録される。

(10) *Attendez-moi ici un moment.*

⁶ 同じように談話情報の累積性を考えたモデルとしては *Langacker* (2001) があるが、残念ながらその考察は断片的であり、実際に動かせるように実装されていない。

(11) 「その時計，どうしたの」「これは誕生日にもらったんだ」

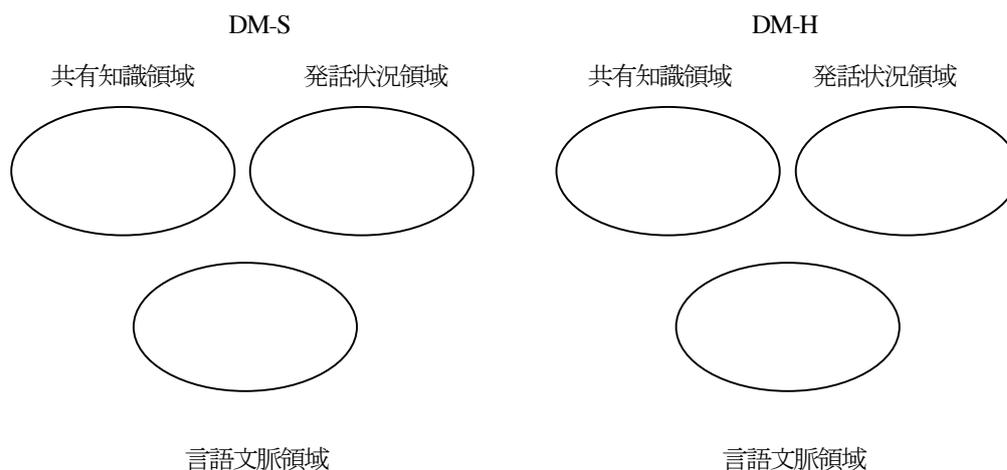
(10)の *moi*, *ici* のような直示表現は典型的な発話状況領域の要素であり，また *un moment* もまた「今から少しの間」のように発話時点を基準として理解されるため，発話状況領域を解釈領域とする．また (11) のように日本語の指示詞コ・ソ・アはその直示用法において，発話状況領域を空間分割する．

最後に言語文脈領域は談話開始時において白紙状態で，談話の進行に従って談話指示子と文の意味情報が書き込まれてゆく領域である．

(12) *Une femme entra dans le hall. Paul avait vu cette femme chez une amie.*

不定名詞句 *une femme* によって言語文脈領域に談話指示子が導入され，後続文の *cette femme* はその談話指示詞を照応的に指す．このように照応過程は基本的に言語文脈領域において処理される．なお，このようなモデルを考える以上，文脈照応の場合でも照応表現が指すものは先行文脈に存在するのではなく，聞き手の心的モデル内に探索されることに注意しておこう．

談話モデルには話し手側のモデル (DM-S)と聞き手側のモデル (DM-H) を想定する．



このような言語観においては，発話とはその中に含まれた様々な言語的マーカーによって，聞き手の心的状態をアップデートする操作と捉えられる．たとえば不定名詞句は聞き手のモデル DM-H に新たな談話指示子を登録せよという指令と考えることができる⁷．

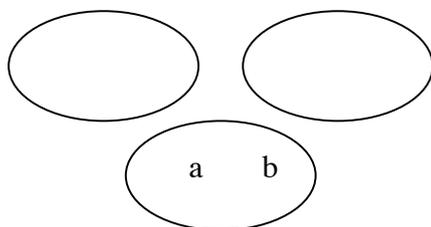
このモデルを用いてミニ談話 (8) を表現すると次のようになる．なお以下では図式の煩雑化を避けるため，聞き手側のモデル (DM-H) のみを表示する．

まず *Un homme est entré dans la salle d'attente.* という発話によって，*a = un homme*, *b = la salle d'attente* のふたつの談話指示子が言語文脈領域に登録される⁸．すでに述べたように，*a* と *b* は変

⁷ Fauconnier (1994) や坂原 (2000) を参照のこと．

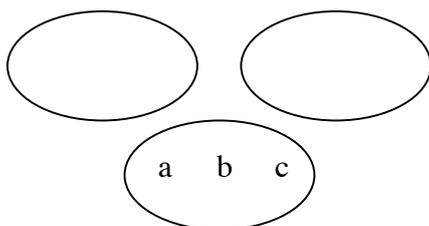
⁸ すでに指摘したように，*b = la salle d'attente* は明示的な指令による導入ではなく，調整 (accommodation) によってあらか

数ではなく、言語文脈領域においては以後定数のように振る舞う。aにはこの時点で [a est entré dans la salle d'attente]という情報が付加されている。



a = un homme b = la salle d'attente
[a est entré dans b]

次に Il s'est assis à côté d'une vieille dame. が処理されるが、まず il は定表現解釈規則⁹によって、すでに言語文脈領域に登録済みで、[男性, 単数]という素性を持つ談話指示子を探索せよという指令である。これに対応するのは a であり、a = il と理解される。また不定表現 une vieille dame によって新たな談話指示子 c が登録され、次のような構成にアップデートされる。



a = un homme b = la salle d'attente
c = une vieille dame
[a est entré dans b]
[a s'est assis à côté de c]

最後の Il portait un pardessus gris.では新たに d = un pardessus gris が導入され、a に [a portait d] が付加されるが、どのような操作かはすでに明らかと思うので、更新された図式は省略する。

4. 複数の領域にまたがるハイブリッド型指示

このように登録される情報の由来・性格によって3つの下位領域を持つモデルを考える利点は、指示表現の働きを今までよりも正確に記述し説明することができるという点にある。この点を日本語の指示詞コ・ソ・アを例にとって示してみよう。コ・ソ・アの用法は現場指示（直示）、文脈指示（照応）、観念指示の3つに分けることができる。

(13) 現場指示

- a. 「これは何ですか」「それは新型のパソコンです」
- b. あそこに木があるでしょう。あの木まで競争しましょう。

現場指示にはコ・ソ・アのすべてが用いられ、話し手からの近・中・遠という距離原理と、1

も既に導入済みの要素であるかのように聞き手に理解される。これは談話的な前提の押しつけに他ならない。

⁹ Fauconnier (1994)を参照。

人称・2人称・3人称という人称原理によって空間分割される¹⁰.

(14) 文脈指示

- a. 「大学の近くに進々堂という古い喫茶店があるんですよ」「その / *この / *あの喫茶店
はどれくらい古いんですか」
- b. [TV ニュースで] 昨夜, 京都市左京区で民家が焼ける火事がありました. この / ?そ
の / *あの火事で二人が軽い火傷を負いました.

文脈指示ではデフォルトでソが用いられるが, (14 b) のようにコが好まれる場合もある¹¹.

(15) 観念指示

- a. これはあの / *その / *このアインシュタインでも解けなかった問題だ.
- b. 去年那覇で入った沖縄料理店, 覚えていますか. あの / *その / *この店はとてもおい
しかったですね.

観念指示ではアのみが用いられる. (15 a) は共有知識領域の中の百科事典的知識領域に登録済みの談話指示子「アインシュタイン」を指している. (15 b) は共有知識領域の中のエピソード記憶領域に登録されている「沖縄料理店」を指している. (15 b) では一見すると先行詞があり文脈指示ではないかと思われるかもしれないが, 「あの」は文脈に存在する先行詞を指すのではなく, 話し手と聞き手が共通に体験し, 記憶の中に蓄えている談話指示子を指すので, 観念指示と見なすべきである.

このように考えれば, 日本語の指示詞コ・ソ・アは談話モデルの領域に次のように割り振られて機能を分担していることがわかる.

- (16) a. 現場指示 コ・ソ・ア 発話状況領域
- b. 文脈指示 ソ・コ 言語文脈領域
- c. 観念指示 ア 共有知識領域

a. から c. へと進むに従って用いられる指示詞の数が減少しているのは, 物理的な現場から言語的な文脈へ, さらに記憶としての観念へと抽象度を増すに従って, 領域分割が困難になるためである. また現場指示で遠称と近称の区別をする言語においては, 観念指示に用いられるのが必ず遠称であることも同様に理解されよう.

このように領域分割して指示の問題を考える利点は, 複数の領域を発動させるハイブリッド型の指示をうまく扱うことができるという点である. 詳細については東郷 (2000) を参照していただきたいが, ひとつだけ例を挙げておこう.

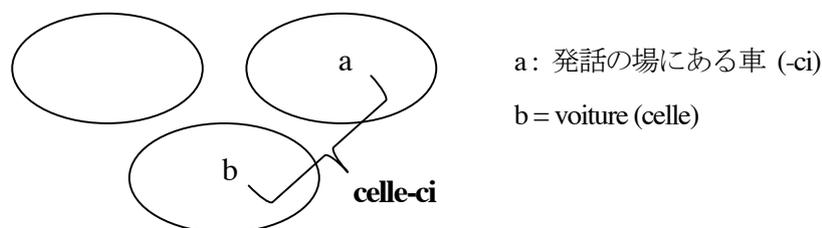
¹⁰ 指示詞コ・ソ・アの現場指示用法において, 距離原理と人称原理のどちらがより本質的かという点については, さまざまな議論が重ねられているが, ここではその問題には立ち入らない.

¹¹ 文脈指示におけるコとソの選択原理についてもさまざまな議論があるが, ここではその問題には立ち入らない.

(17) A: [駐車場で自動車を指差しながら] C'est ta voiture ?

B: [別の自動車を指差して] Non, ma voiture, c'est celle-ci.

指示代名詞の *celui / celle* は性数の変化があることからわかるように、文脈指示が基本的用法である。言い換えれば「モノを指す」用法ではなく、「コトバを受ける」のが基本である。この例では *celle-ci* の *celle* の部分が先行文脈の *voiture* という単語の代用である¹²。したがってこの部分は言語文脈領域で働く文脈指示ということになる。ところが *celle-ci* の *ci* の部分は指差し行為を伴って目の前にある自動車を指しているのだから、これは現場指示である。すなわちこの例の *celle-ci* は、言語文脈領域から言語的情報を引き出しながら、発話状況領域で直示を行なっている。この意味で *celle-ci* は言語文脈領域と発話状況領域の両方にまたがるハイブリッド型の指示と見なすことができる。*celle-ci* の指示のメカニズムを図示すると次のようになる。



a は発話の場に存在する物理的実体としての自動車であり、b は言語文脈領域に書き込まれた単語としての *voiture* である¹³。意味論的に考えれば b = *voiture* は内包しか持たず、a = [発話の場にある車] は外延しか持たないので、両者を結合した *celle-ci* によって内包と外延がそろった完全な指示表現となる。

5. token - type 指示

ここで本稿の冒頭で挙げた次の例を見てみよう。先行詞と照応詞の数の不一致という問題のある例である。同様の例をもう一つ挙げる。

(18) A German shepherd bit me yesterday. *They* are really vicious beasts. [= (4)]

(19) [数歩先にガラガラヘビが一匹いるのを見て]

a. Watch out! *It* bites without warning.

b. Watch out! *They* bite without warning.

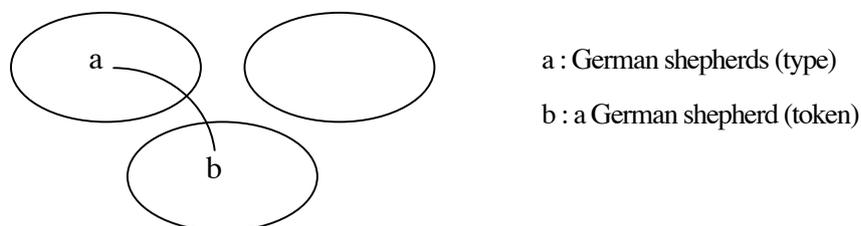
¹² もう少し正確に言うると、*celle* は *voiture* という単語の意味的素性 [+singulier, +féminin] とその内包のみを継承する。*celle* が単独では用いられず、*-ci / -là* や、*de Paul / que j'ai achetée* などの補足語を必要とするのは、それらの補足語によって外延が与えられるためである。

¹³ より正確には言語文脈領域に書き込まれるのは *ma voiture* に対応する談話指示子で、*celle* はその主要部名詞 *voiture* の意味的素性と内包を受け継ぐ。

(19)では (19 a) のように it を使えば先行詞と数が一致するが、(19 b) のように they を使うことも可能である。このような照応の例を扱うには token – type 指示というメカニズムを考えなくてはならない。

(18) を例に取ろう。昨日私を噛んだシェパードは特定の一頭の犬であり、限定された時空間に存在している。このように把握された個体を token と呼ぶ。これに対して (18) の後続文 *They are really vicious beasts.* の they を名詞句に復元すると、*German shepherds are really vicious beasts.* となり、これは総称文である。したがって主語の *German shepherds* は特定の個体を指すのではなく、犬種としての「シェパード」を指す。犬種としての「シェパード」は限定された時空間に存在するのではなく、時空を超えた類型として存在している。この類型が type である。(18)では第1文の a German shepherd (= token) をトリガーとして German shepherds (= type) が引き出され、第2文の主語 they はこれを指している。このような照応を token – type 指示と呼ぶ。第1文の a German shepherd と第2文の they (= German shepherds) は数が一致していないだけでなく、token と type という entity レベルが異なるのである。したがって第1文の a German shepherd を they の「先行詞」と呼ぶのは適切ではない。照応過程のトリガー (déclencheur) と呼ぶべきだろう¹⁴。

心的領域を分割する談話モデルを用いると、token – type 指示のように entity レベルが異なる照応もうまく扱うことができる。(18) を図示すると次のようになる。



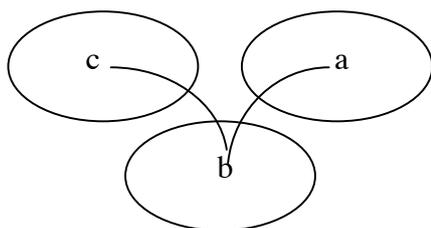
(18) の第1文 *A German shepherd bit me yesterday.* の不定名詞句 *a German shepherd* によって、言語文脈領域に談話指示子 *b* が書き込まれる。共有知識領域の *a* は犬種すなわち type としての *German shepherds* を表す談話指示子である。これは共有知識領域内の百科事典的知識領域にあらかじめ格納されている。私たちは「この世にはシェパードという犬種が存在する」ことを知っているからである。*a* と *b* を結ぶ弧はメンタル・スペース理論で用いられているコネクタの一種で、token – type コネクタと呼ぶ。*b* と *a* はコネクタで結合されているので、*b* を起点として *a* に至ることができる。第2文 *They are really vicious beasts.* の主語 *they* は、こうしてたどり着いた共有知識領域の *a* を指している。

¹⁴ 本稿と同じく照応過程の分析に心的モデルの立場を採る Comish (1999) は、*antecedent* という呼び方は適切でなく、*antecedent-trigger* とすべきだと主張している。

さらに複雑な経路をたどる指示の様態もある。

(20) [目の前のパソコンを指差しながら] このパソコンはうちにもある。

この文の意味はもちろんうちの家にも同一の個体があるという意味ではなく、同一機種たとえば東芝 dynabook の別の個体がうちにあるという意味である。目の前のパソコンは token であり、うちにあるパソコンも token である。しかし両者を繋いでいるのは type としての東芝 dynabook だから、ここでは token → type → token という指示の流れがあることになる。



a: 目の前のパソコン (token)

b: 言語化された「このパソコン」 (token)

c: 東芝 dynabook (type)

a は発話状況領域に存在するパソコンで token である。a は「このパソコン」として言語化されることで言語文脈領域に b として書き込まれる。a と b を結んでいるのは通常の ID コネクタである。b は共有知識領域にある type としての「東芝 dynabook」をさす c と token – type コネクタで結合される。これにより言語文脈領域の b = 「このパソコン」は type としての「東芝 dynabook」を指すことができる。つまり (20) の「このパソコン」は目の前の token を指すと同時に type としての機種をも指すという二重の指示を行なっているのである。

それでは (20) で「うちにもある」と述べられている、話し手の自宅にある token はどうなるのだろうか。実はこれは上の図では表現されていないが、「うちにもある」という述語によって c (= type) から新たに切り出されていると考えられる。なぜなら「うちにもある」というのは、局所的空間での存在を述べていて、type は局所的空間には存在できず、存在できるのは token に限られるからである。しかし切り出された token には言語表現が与えられていない。

実はフランス語の照応にも同じような type からの token の切り出しを観察することができる。

(21) a. Elle a vu une robe dans la vitrine. Elle est entrée et l'a achetée noire.

b. Jean cherchait une bonne. Finalement, il l'a choisie espagnole. (Olsson-Jonasson 1984)

(21 a) を例に取ると、第 1 文の une robe は token である。しかし店に入って彼女が買ったのは、ショーウィンドウに飾られていた token ではなく、色違いの黒いドレスである。したがってここにも、ショーウィンドウに飾られていたドレス (token) → type としてのドレス → 彼女が買った黒いドレス (token) という指示の経路がある。興味深いのは第 2 文の代名詞 l' (= la) は token としての une robe を先行詞としながら、type レベルのドレスをも指しているという事実である。これは (20) で「このパソコン」が token 指示と type 指示の両方を同時に行なっているのと平行的で

ある。

また (21 a)で彼女が購入した token レベルのドレスに相当する言語表現がないことに注意されたい。Elle a acheté という特定の時空で生起する一度切りの出来事を表す述語によって token が切り出されていると考えられる。Elle la porte aujourd’hui. と続けた場合, la でそのドレスを照応できることがそれを示している。

(21 b)では chercher が内包動詞であるため, Jean cherchait une bonne. の目的語 une bonne が内包的文脈で非特定解釈されるというさらに複雑な問題があるが, 基本的には (21 a)と同じように分析することができる。

6. 量化をとまなう指示と照応

指示と照応のなかには量化 (quantification) の操作を考慮しなくてはならないものがある。まず明示的に量化があるケースを見てみよう。

(22) Tous les soirs à 6 heures un héron survole notre chalet. (Olsson-Jonasson 1984)¹⁵

この文には次のふたつの解釈が可能だとされている。

(23) a. Il y a un héron qui survole notre chalet tous les soirs à 6 heures.

b. Tous les soirs à 6 heures quelque héron survole notre chalet.

(23 a)は特定の1羽のサギが毎日飛来するという意味で, (23 b) は特定の1羽とは限らないという意味である。Olsson-Jonasson は (23 a)には次の (24 a)の文を続けることができ, (23 b)には (24 b)が続くとしている。

(24) a. Il fait son nid dans le parc du château.

b. Ils font leur nid dans le parc du château.

このケースでは tous les soirs が全称量化子を含み, 不定名詞句 un héron がそのスコープ内に入るかそれとも入らないかという伝統的な作用域関係として扱うことができる。それぞれの論理式を示す。

(25) a. $\exists x [\text{héron}(x) \wedge \forall y (\text{soir}(y) \rightarrow \text{survoler-notre-chalet}(x) \wedge \text{in } y \text{ à } 6 \text{ heures})]$

b. $\forall y [(\text{soir}(y) \rightarrow \exists x (\text{héron}(x) \wedge \text{survoler-notre-chalet}(x) \wedge \text{in } y \text{ à } 6 \text{ heures}))]$

(25 a) は un héron の広い作用域読みで, (23 a) の意味を表している。(25 b)は un héron の狭い作用域読みで, (23 b) の意味に対応する。

ここでは (25 b) を特に取り上げる。(25 b) では un héron が tous les soirs の作用域に入っているので, 次のような状況の集合が表現されていることになる。

¹⁵ もともとの出典は Lyons, J., *Semantics* vol.1, Cambridge 1977 である。

tous les soirs	{	<table style="border-collapse: collapse; margin: 0 auto;"> <tr><td style="padding: 2px 10px;">sit 1</td><td style="padding: 2px 10px;">→</td><td style="padding: 2px 10px;">héron 1</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">sit 2</td><td style="padding: 2px 10px;">→</td><td style="padding: 2px 10px;">héron 2</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">sit 3</td><td style="padding: 2px 10px;">→</td><td style="padding: 2px 10px;">héron 3</td></tr> </table>	sit 1	→	héron 1	sit 2	→	héron 2	sit 3	→	héron 3	}	Ils font leur nid...
sit 1	→	héron 1											
sit 2	→	héron 2											
sit 3	→	héron 3											

sit は tous les soirs によって量化される状況で、それぞれの状況には1羽のサギが含まれる¹⁶。状況ひとつ当たりに含まれるサギは1羽なので不定名詞句単数の un héron が用いられているが、状況が複数化されるので、結果的に得られるサギは複数となる。un héron の状況への分配的解釈と考えるとよい。こうすればこの文に Ils font leur nid dans le parc du chateau. を続けられることが理解できる。先行詞は単数 un héron だが、状況への全称量化の結果として複数化され、ils で受けることができる。先行詞と照応的代名詞の数の不一致はこうして解決される。

次の例も同じように分析できる。

(26) A: Why didn't you write to me?

B: I did ... started to, but I always tore *them* up.

この例には them の先行詞すらないが、started to (write a letter) の省略と理解できるので先行詞 a letter を復元することができる。しかしこれは単数形である。この例では always が全称量子として働き、(25) と同様に a letter を複数化するために them の照応が可能になる。

次に日本語の次のような例を見てみよう。

(27) a. 子育ての秘訣はその子の個性を伸ばしてやることだ。

b. 餡の塩加減はその日によって微妙に変えています。

c. その日の気分でメガネを着替える。

d. その場の思いつきでものを言っははいけません。

こういったソ系指示詞の用法の問題点は、現場指示、文脈指示、観念指示という、従来の指示詞の用法のどれにも納まらないという点にある。指示対象が現場にあるわけではないので現場指示ではない。先行詞がないので文脈指示でもない。また観念指示はア系指示詞に限られるため、観念指示とも考えられない。分類することができないのである。

日本語学ではこのようにどこにも分類できない指示詞の用法を「あいまい指示」として片づける傾向がある。典型的なあいまい指示は次のようなものである。

(28) A: どちらへお出かけで。

B: ちょっとそこまで。

ただしこの用法は現場指示で、「そこ」「そのへん」のような場所表現に限られるので、(27) のケースとは異なる。

¹⁶ ここではわかりやすいように、状況ごとに含まれるサギは異なる個体して番号を振っているが、部分的に同じ個体でもよい。たとえば、一昨日来たサギと今日来たサギとがたまたま同一個体であってもかまわない。

金水・岡崎・曹 (2002) は (29) を匿名指示もしくは空欄指示, (30) を logo 指示としている。

(29) a. 「誰それ」「どこそこ」「その場しのぎ」などの慣用句

b. その日の気分でメガネを変える。

(30) その日¹が何の日か知っていて行ったわけではないのに、私が旅先に着いた日が有名な祭りの日や行事の当日だった、ということがよくあった。

金水・岡崎・曹 (2002) は, (30) の logo 指示用法について, 話し手の一回一回の思考内容を直接引用的に書き表すと「この日が何の日か」となり, 指示対象は固定的で指示的であるが, その思考内容が引用節中に現れると「この日」の固定性が邪魔になるので, 「その日」に書き換えられたのだと説明している。この説明の妥当性はひとまず置くとして, (27) で挙げた例は引用節に現れているわけではなく独立節であり, この説明は当てはまらない。また (29) の匿名指示・空欄指示のメカニズムにも十分な説明は与えられていない。

本稿は (27) は「あいまい指示」などではなく, 隠れた量化 (covert quantification) の結果として表れたソ系指示詞だと考える。次を例として説明しよう。

(31) 子育ての秘訣はその子の個性を伸ばしてやることだ。 [= (27 c)]

この文は子育ての秘訣を一般論として, もしくは教訓として述べたものである。一般論・教訓は多くのケースに当てはまる事柄を言う。あなたの子育てにも, 私の子育てにも当てはまるのである。つまり「あらゆる子育てのケースに当てはまる」のであり, 子育ての状況の集合が次のように形成されると考えることができる。

(隠れた量化子) $\left\{ \begin{array}{l} \text{sit 1} \rightarrow \text{子供 1} \\ \text{sit 2} \rightarrow \text{子供 2} \\ \text{sit 3} \rightarrow \text{子供 3} \end{array} \right\}$ その子

sit はひとつひとつの子育ての状況に当たる。ひとつひとつの sit に一人の子供が含まれている。

ひとつひとつの sit を取り上げれば, そこに含まれる子供は特定の子供であろう。ところが状況が複数化されることで子供も複数化され, 結果として不定指示もしくは「あいまい指示」のように見えるのである。

同じように状況が複数化される (25 b) には *tous les soirs* という明示的な量化表現があったが, (31) にはそれに相当するものがない。ここでは文末の「やることだ」というモーダル表現が導く隠れた量化が働いていると考えることができる。このようなソ系指示詞が使えるためには, 文が一般論を述べていたり習慣文であったりして, 意味的に状況の複数化が可能でなくてはならない。その証拠に文末を次のように一度きりの出来事を表す形に変えると, 「その日」は特定の日を指すことになる。

(32) 餡の塩加減はその日に変えた。

またソノに後続する名詞は、「日」「年」のような時間単位表現や、「場」のような場所表現、「都度」のような回数表現がよく用いられるのも、これらの語がもともと状況の複数性を導きやすいためだと考えられる。また「その場その場で」とか「その日その日で」のように、反復形式が用いられるのも状況の複数化をアイコン的に表していると思なすことができる。これが固定化すると「その日暮らし」「その場かぎり」のような慣用句になる。

なおこのような指示詞の用法はソ系に限られる。

(33) 子育ての秘訣はその /*この /*あの子の個性を伸ばしてやることだ。

コノやアノを用いると特定の子供を指すことになる。

よく知られているように、次のようないわゆる束縛照応読みもソ系指示詞にしか見られない。

(34) どの国もその /*この /*あの領土を守る権利がある。

ここでも明らかに「どの国も」による全称量化が働いており、その点で (33) のような用法と類似する。

隠れた量化による指示や束縛照応などの量化が関係するとき、日本語ではソ系指示詞しか用いることができない。これはなぜかというのは興味深い問題だが、本稿の射程を越えるので別の機会に譲りたい¹⁷。

7. 指示形容詞による総称

では最後に指示形容詞を用いた総称名詞句について考えてみたい。この問題についてはフランス語学研究畑では「周知の指示形容詞」(*démonstratif de notoriété*) という呼び名のもとで、次のような例を中心に取り上げられてきた。

(35) *Toutes choses, doucement, tendrement, se laissaient aller à l'existence, comme ces femmes lasses qui s'abandonnent au rire et disent « C'est bon de rire » d'une voix mouillée.* (Sartre, *La Nausée*)

この問題はフランス本国よりも日本で盛んに議論され、春木 (1990)、東郷 (1991)、Haruki (1993)、井元 (2000)、小田 (2003)、春木 (2012) などの論文が相次いで発表されている。本稿ではそこで問題とされた論点を追うのが目的ではなく、(35) のように関係節を伴う *ces N qui ...* 型とは異なるタイプの指示形容詞による総称名詞句を取り上げる。

Bowdle & Ward (1995) は英語圏で指示形容詞を用いた総称文を扱った数少ない論文のひとつであるが、彼らは関係節を伴う *ces N qui ...* 型には一顧だにせず、次のようなタイプの総称名詞句に話を限っている。

¹⁷ この問題に対しては堤 (2002) が独自の世界モデルを用いて説明を試みている。堤の提案する3つの世界のうち、*Wo* は談話モデルの発話状況領域に、*Wp* は言語文脈領域に、*Ws* は共有知識領域に大まかに対応すると考えられる。これをヒントにすると、量化は言語文脈領域でしか行えず、言語文脈領域のデフォルト指示詞はソ系指示詞なので、量化の関係する照応はソ系指示詞に限定されるということになる。

(36) A : My roommate owns an IBM ThinkPad.

B : *Those IBM ThinkPads* are quite popular.

(37) A : My cousin just returned from Canada with an adorable Labrador retriever puppy.

B : *Those Labradors* are extremely loyal, you know.

(36 b) (37 b) は IBM ThinkPads や Labradors というクラス全体について何らかの属性を述べているので、総称的に用いられていることはまちがいない。このタイプは (35) と異なり関係節を伴わず、また文の主語として用いることができるという特徴がある¹⁸。

しかし Bowdle & Ward (1995) では忘れられている重要な点がひとつある。それは通常の総称文は単独で用いることができるが、(36 b) (37 b) のようなタイプの総称文は単独で用いることはできず、他の発話への応答にしか用いられないという事実である。

(38) a. *Labradors* are extremely loyal.

b. * *Those Labradors* are extremely loyal.

(38 a) のような裸複数名詞 Labradors による通常の総称文は単独で発話でき、また談話の冒頭の発話になることができる¹⁹。しかし指示形容詞による総称文 (38 b) はそれができない。(36 b) の *those IBM ThinkPads*, (37 b) の *those Labradors* はそれぞれの話し手 A の発話への返答としてのみ成立する総称表現である。つまり *those N* という形式はそれ自体では総称表現たりえないのであり、話し手 A の発話に含まれた *an IBM ThinkPad* や *an adorable Labrador retriever puppy* の存在を前提とする一種の照応表現と考えなくてはならない。つまりそれぞれにおいて次のような照応過程が働いているということである。

(39) a. [(36 b)] *an IBM ThinkPad* → *those IBM ThinkPads*

b. [(37 b)] *an adorable Labrador retriever puppy* → *those Labradors*

(35) のような「周知の指示形容詞」には先行詞は存在せず、このような照応過程も働いていないので、これとは別のタイプと考えるべきである。この点は後で再び取り上げる。

Bowdle & Ward (1995) の興味深い点は、(36) (37) タイプの指示形容詞を用いた総称文について、次の3つの制約があることを明らかにしているところである。フランス語学の周知の指示形容詞をめぐる議論では、このような制約に触れられたことは知る限り一度もない。

まずこのタイプの総称文の述語は、話し手の評価を表すもの (evaluative) でなければならない。

(40) A : My cousin just returned from Canada with an adorable Labrador retriever puppy.

B : * *Those Labradors* were first bred in Newfoundland, you know.

¹⁸ (34) のような関係節を伴う *ces NP qui...* 型が主語として用いられないという点については春木 (2012) を参照。

¹⁹ 総称名詞句はこの他に、定冠詞単数を用いた *The labrador is...*、不定冠詞 *A labrador is...* があり、これらも単独の発話あるいは談話の冒頭で用いることができる。本稿ではこれらの総称名詞句のちがいについては触れない。

(36)(37) の述語 *be quite popular*, *be extremely loyal* は評価的だが²⁰, (40 B) は客観的な歴史的事実を述べているだけで評価的ではない。このような述語については *those N* は総称名詞句として働かない。

2つめの制約は、指示形容詞による総称文の主語名詞句は、聞き手もよく知っているクラスを表すものでなければならないというものである。

(41) A : *My brother just bought a small car.*

B : *Those small cars are dangerous!*

(42) A : *My brother just bought a red car.*

B : **Those red cars are so garish!*

(41 B) の *small cars* は「小型車」という文化・社会的に確立された集合を指しているが、(42 B) の *red cars* はそうではない。「赤い車」という確立されたクラスは存在しない。このような名詞句は指示形容詞による総称文で用いることができないという。

最後の制約は、主語に基本レベルカテゴリー語²¹は使うことができず、それより下位の *subordinate* レベルの語でなくてはならないというものである。

(43) A : *My roommate just bought a dog.*

B : **Those dogs make great pets.*

(44) A : *My roommate just bought a Labrador.*

B : *Those Labradors make great pets.*

(43 B) の *dogs* は基本レベルカテゴリーであるため使うことができないが、(44 B) の *Labradors* は犬の下位種で基本レベルカテゴリーより一段下のカテゴリーであるため可能となるとされる。

Bowdle & Ward (1995) によるこれらの制約の指摘は興味深いが、残念なことに彼らはなぜ *those N* にこのような制約が課せられるのかを説明していない。これら3つの制約はそのままフランス語にも当てはまるようである。

(45) A : *Mon cousin est revenu du Canada avec un adorable chiot de labrador.*

B1 : *Ces labradors sont vraiment fidèles à leur maître, tu sais.*

B2 : **Ces labradors ont été d'abord élevés à Terre-Neuve, tu sais.*

(46) A : *Mon frère vient d'acheter une petite voiture.*

B : *Ces petites voitures sont dangereuses !*

(47) A : *Mon frère vient d'acheter une voiture rouge.*

²⁰ ここでは *popular* や *loyal* がそれ自身の意味において評価的というより、*quite*, *extremely* という主観的尺度を表す副詞が述語の評価性を高めていると考えられるが、この問題についてはこれ以上立ち入らない。

²¹ 基本レベルカテゴリー (*basic level category*) については Rosch (1978) を参照。

B : **Ces voitures rouges sont dangereuses !*

(48) A : Mon cousin vient d'acheter un labrador.

B : *Ces labradors* sont d'excellents compagnons.

(49) A : Mon cousin vient d'acheter un chien.

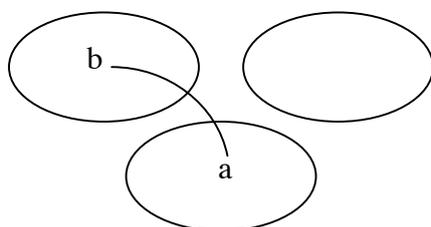
B : **Ces chiens* sont d'excellents compagnon.²²

Bowdle & Ward (1995) では説明されていなかったこの制約を、談話モデルを用いて説明することを試みてみたい。まずその入り口として次の日本語の例を考える。

(50) A : ほら、去年の夏に沖縄に行ったときに、那覇で入った沖縄料理店があったでしょう。

B : ああ、あの沖縄料理店はとても美味しかったですね。

すでに述べたように、B の発話の「あの沖縄料理店」は文脈指示ではなく観念指示である。A は自分の発話によってBに共有知識領域のなかのエピソード記憶領域を探索するようにうながしている。Bはこの指令に基づいて自分の談話モデルのなかの共有知識領域内のエピソード記憶領域を探索する。するとAが「去年の夏に沖縄に行ったときに、那覇で入った沖縄料理店」という記述を与えた談話指示子が見つかったので、「あの沖縄料理店」と言っているのである。このときBの談話モデルは次のようになる。



aは話し手Aの発話の「去年の夏に沖縄に行ったときに、那覇で入った沖縄料理店」によって聞き手Bの言語文脈領域に登録された談話指示子である。bはBの共有知識領域のなかのエピソード記憶領域に直接体験によってすでに登録済みの談話指示子を表す。aとbはIDコネクタで結合される。Bの発話の「あの沖縄料理店」はbを指している。

このとき次の2点が重要となる。

(I) 聞き手のエピソード記憶領域を呼び出すには、「ほら、○○があったでしょう」のような呼び水表現が必要である²³。

²² ただし、(49 B)には Gary-Prieur (1998) が正しく指摘しているように、*ces chiens* のサブクラス読みが可能である。つまり先行文脈でラブラドルが話題になっており、そのラブラドルという犬種を指すために *ces chiens* を用いる場合である。このサブクラス読みであれば (49 B) は総称文として成立する。ここではこの読みは問題にしない。

²³ ただし、独り言の場合は、「しまった、あの書類を持って帰るんだった」のように、呼び水表現なしでいきなり観念指示のアが用いられることがある。ここで問題にしているのは対話場面であり、このケースは考えない。

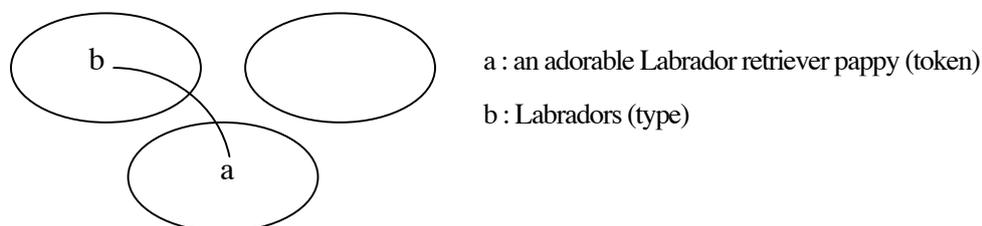
(II) 呼び水表現によって探索される談話指示子は、共有知識領域のなかのエピソード記憶領域にあらかじめ登録済みである。

これを念頭に置いて指示形容詞による総称文をもう一度見てみよう。

(51) A : My cousin just returned from Canada with an adorable Labrador retriever puppy.

B : *Those* Labradors are extremely loyal, you know.

ここで呼び水表現として働いているのは A の発話である。すでに述べたように、ここには an adorable Labrador retriever puppy → those Labradors という照応過程があり、呼び水表現のなかの名詞句が一種の先行詞となっている。そして (those) Labradors の指示対象は B のエピソード記憶領域にある。談話モデルで示すと次のようになる。



(50) の日本語の例では、a = 「去年の夏に沖縄に行ったときに、那覇で入った沖縄料理店」も b = 「あの沖縄料理店」も token であり、両者は ID コネクタで結ばれていた。しかし、(51)の a は token だが b は type で、両者を結んでいるのは token-type コネクタである。

一般に総称文に現れる総称名詞句は共有知識領域内の百科事典的知識領域にあると考えられる。総称文はその名詞句の表すクラス全体について恒常的に成り立つ性質を述べるものであるので、この想定は妥当なものと考えられる。

(52) a. *Dogs* are loyal.

b. *The cat* is carnivorous.

しかし (51) のような指示形容詞による総称文では、those N の N に相当する談話指示子は、百科事典的知識領域ではなくエピソード記憶領域に登録されている。このように考えれば、指示形容詞による総称文の特徴をうまく説明することができる。

まずこのタイプの文は単独で用いたり談話の冒頭で用いることができないが、それはエピソード記憶を呼び出すためには呼び水表現が先行しなくてはならないからである。(51)は文脈指示をトリガーとする観念指示であり、文脈を必要とする。

次に述語が評価的でなくてはならないのは、エピソード記憶領域の特性に由来する。百科事典的知識領域は (52) のように万人にとって時空に関係なく成り立つ恒常的の性質を表す情報が格納される領域である。これにたいしてエピソード記憶領域はより個人的・体験的色彩が強い情報が

格納される。述語が評価的でなくてはならないのはこのためであると考えられる。

小田 (2003) は筆者の談話モデル理論を用いて周知の指示形容詞を分析しているが、そこでは周知の指示形容詞を「名詞句 Ce N によって導入される指示対象をデータベースの中の百科事典的知識に参照させる用法」(p.43) と定義している。小田のいう「データベース」は筆者の「共有知識領域」と同じものである。井元 (2000) も「百科事典的知識」と言い、春木 (2012) も「長期記憶 (長期記憶+百科辞典的知識)」という操作概念を用いて説明を試みている。小田 (2003) , 井元 (2000) , 春木 (2012) の議論は主にフランス語の *ces N qui...* 型に焦点を当てているのだが、この構文で発動されるのが「(擬似的な) 百科事典的知識」であるというのは妥当な分析だと思われる。筆者もその分析に賛成である。

しかしながら Bowdle & Ward (1995) が取り上げた (51 B) のタイプの総称文は、百科事典的知識ではなくエピソード記憶を参照するものである。この点においてフランス語の *ces N qui ...* 型の周知の指示形容詞とはその働き方において区別されなくてはならない。

次に Bowdle & Ward (1995) が指摘した「総称名詞句は聞き手によく知られたクラスを表すものでなくてはならない」という2つめの制約であるが、これはかんたんに説明できる。本稿では *those N* の *N* (*those Labradors* の *Labradors*) に当たる談話指示子はエピソード記憶領域にあらかじめ登録されていると考える。つまりこの表現を用いる話し手は、*N* に関して個人的体験や伝聞に由来する、抽象的ではない知識を有している必要がある。エピソード記憶領域には百科事典的知識領域よりも体験的・個人的色彩の強い情報が格納されるからである。とはいえ百科事典的知識を参照するふつうの総称文と同じく、*N* がクラスを表す *type* レベルの名詞であることには変わらない。*N* は話し手と聞き手のあいだで共有可能なクラスでなくてはならない。共有可能なクラスとは社会・文化的に確立されたクラス (つまり、「ああ、あれね」と思い浮かべることのできるもの) であり、その場限りのものであってはならない。これが2つめの制約が *N* に課せられる理由である。

最後に *those N* の *N* が基本レベルカテゴリーではなく、それより下位のカテゴリーでなくてはならないという制約については、次のように考えたい。

(53) a. *Les chiens sont fidèles à leur maître.*

b. 犬は主人に忠実だ。

このようなふつうの総称文で用いられるのは、フランス語では冠詞 (*les, le, un*) であり、日本語では「犬」のような裸名詞である。ところが *those N* には強い探索指令を持つ指示形容詞 *those* が含まれている。一般に指示形容詞は、発話状況領域か言語文脈領域にその指示対象を探せという指令だが、それだけにとどまらない。その領域内に存在する同種の *N* のなかから特定の *N* をピックアップせよという指令でもある。たとえば洋服店で *Je prends ce pull.* と言えば、それは店内

にあるたくさんのセーターのなかから特定のセーターを選択することを意味する。「犬」のような基本レベルカテゴリーではこの操作は不可能で、一段下の下位カテゴリーならば犬に属するので同種ではあるものの、{ラブラドル、チワワ、スピッツ、etc.}のように差異を持つクラスの集合が構築され、thoseはそのなかから特定のクラスを選ぶことになる。those N による総称が下位レベルのカテゴリーでのみ可能なのはこのような理由による。

興味深いことに同じ制約は日本語のア系指示詞にも観察される。

(54) a. 犬は主人に忠実だ。

b. ラブラドルは主人に忠実だ。

(55) a. *あの犬って主人にとっても忠実だ。

b. あのラブラドルってものすごく忠実なんだってね。

裸名詞による総称は「犬」のような基本レベルカテゴリーでも、「ラブラドル」のような下位レベルカテゴリーでも等しく可能である。ところが「あの N」による総称では、「犬」は不可だが「ラブラドル」は可能である。

なお (55 b) は口語的で対話的な文例にしてあるが、これは意図的である。これを「あのラブラドルは主人に忠実だ」のように客観的な総称文にすると、筆者の語感では容認度が下がる。これは日本語でも「あの N」による総称が、聞き手のエピソード記憶領域に訴えかけるものであるため、聞き手を想定した対話的状况において用いられるから考えられる。英語の those N についても同じことが言える。Bowdle & Ward (1995) が挙げている文例がすべて対話であるのは理由のないことではない。なおフランス語の ces / ce を用いた総称について、Gary-Prieur (1998) は話し手と聞き手の関係を浮上させるものとして、やはりその対話的性格を強調している。指示形容詞を用いた総称をめぐる議論では、この点はもっと重視されるべきだと思われる。

さて、Bowdle & Ward (1995) では次のような総称文も挙げられていて、ここまで見たラブラドルの例など同じように論じられている。

(56) Those Mexicans!

同様の例はフランス語でも観察され²⁴、井元 (2000)、小田 (2003)、春木 (2012) などでも取り上げられていて、周知の指示形容詞の 1 タイプとされることが多い。

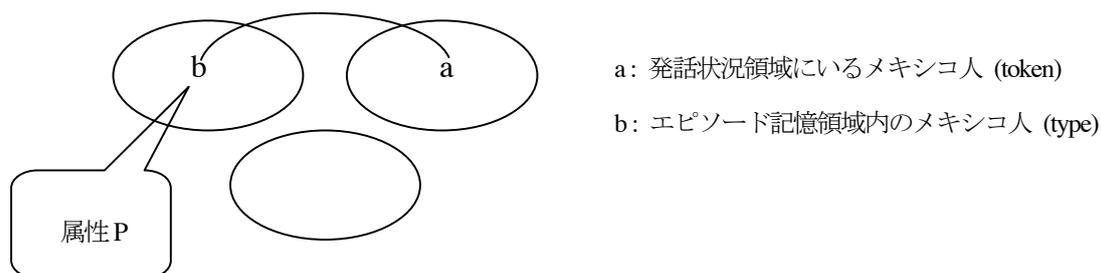
(57) [ダム建設計画の事前環境調査で環境には影響しないと報告した調査団のニュースを見て]

Ah ! Ces experts !

日本語にするならば「あのメキシコ人って奴らは」「あの専門家という連中は」などとなり、ア系指示詞が用いられる。

²⁴ (57) の例は筆者の実際の見聞に基づく。

このタイプの *those N* 総称は述語がないという事実に加えて、用いられる語用論的状況が今までのラブラドルの例とは異なることに注意しなくてはならない。(56) が用いられるのは例えばいっしょに働いているメキシコ人が仕事をさぼったときであり、(57) は環境調査を依頼された専門家が「環境には影響はありません」と発表したというニュースを聞いたときである。*those N* 総称は悪評価を下して非難する場合に用いることが多いが、「仕事をさぼる」「御用学者が権力側の意見を述べる」というような、話し手にとって非難すべき事態が状況のなかに必要とされる。このような出来事を「token 事態」と呼んでおく。一方、*those N* の N、つまり (56) の「メキシコ人」(57) の「専門家」はエピソード記憶領域にすでに登録されているが、その談話指示子には話し手の体験に基づく悪評価の属性があらかじめ付属している。たとえば「メキシコ人」ならば「仕事がいい加減だ」、「専門家」なら「御用学者となって権力側の意見を述べる」という属性である。この属性を P としておく。*Those Mexicans!* 型の総称は、話し手のいる具体的状況に、P を改めて再確認させるような token 事態が生じたときに限り用いることができる²⁵。談話モデルで図示すると次のようになるだろう。



発話状況領域に四角形で示した token 事態が起きる。そこには token としてのメキシコ人 a が含まれている。一方、エピソード記憶領域には type としてのメキシコ人 b が登録されており、b には吹き出しで示した属性 P がすでに付されている。端的に言って P は偏見に他ならない。token 事態への話し手の主観的評価 Q が P と一致し、P を再確認させるものであるときに *Those Mexicans!* 「あのメキシコ人って奴らは」と発話される。

先に見た *Those Labradors are extremely loyal, you know.* 型の *those N* 総称には呼び水発話が必要であり、そのなかに先行詞が含まれていなくてはならないということはすでに述べた。このためこの型の文は談話冒頭の発話としては用いることができないのであった。ところが *Those Mexicans!* 型の *those N* 総称に必要とされるのは呼び水発話ではなく、呼び水事態、すなわち属性 P を改めて再確認させてくれるような token 事態である。このため token 事態さえあれば談話冒頭

²⁵ ただし token 事態を自分で体験せずに、人の話を聞いて伝聞によって知った場合でも用いることができる。したがって、より正確には直接体験か伝聞によって、token 事態に接したときに用いるとするほうがよいかもしれない。

の発話として用いることができる。

Kleiber (1991) はマンガの「アステリックス」の次のような例を挙げて、ここには “généralisation déictique” と呼ぶことのできる操作があるとしている。これは基本的には本稿がすぐ上で述べた token 事態と属性 P の一致確認操作と同じものだと思われる。

(58) Ils sont fous, ces Romains !

また Gary-Prieur (1998) はおそらく次の例でも同じことが起きているとしているとする²⁶。

(59) Elles sont délicieuses, ces poires.

このような操作が行われているという点において Ah, those Mexicans! 型の総称は Those Labradors are extremely loyal, you know. 型の those N 総称とは異なるタイプと見なすべきであり、またフランス語学でよく議論されてきた ces N qui ... 型の周知の形容詞ともまた異なるとするべきなのである。

8. おわりに

本稿ではメンタル・スペース理論に基づく心的領域の分割理論である談話モデル理論を用いて、英語・フランス語・日本語の指示と照応をどのように捉えることができるかを示した。本稿のような心的モデルに立脚すると、文脈指示も含めてあらゆる指示と照応過程において、指示対象は心的モデルのどこかの領域内にあると考えることができる。また token と type という entity レベルのちがいや、量化表現による量化の操作を想定することによって、先行詞と照応詞の数の不一致や先行詞の不在など、照応理論にとって問題となるような現象もうまく説明することができることを示した。

【参考文献】

- Bosch, P. (1983) : *Agreement and Anaphora. A Study of the Role of Pronouns in Syntax and Discourse*, Academic Press.
- Chafe, W. L. (1980) : *The Pear Stories. Cognitive, Cultural, and Linguistics Aspects of Narrative Production*, Ablex.
- Cornish, F. (1999) : *Anaphora, Discourse, and Understanding. Evidence from English and French*, Oxford UP.
- Gary-Prieur, M.-N. (1998) : “La dimension cataphorique du démonstratif. Etude de construction à relative”, *Langue française* 120, 44-50.

²⁶ On voit que la généralité est atteinte à travers la particularité, par la répétition de situations empiriques. (Gary-Prieur 1998)

- Halliday, M. A. K. & R. Hasan (1976) : *Cohesion in English*, Longman.
- Haruki, Y. (1993) “Sur le démonstratif à renvoi notionnel”, 『言語文化研究』 19, 179-192.
- Kamp, H. & U. Reyle (1993) : *From Discourse to Logic*, Kluwer Academic.
- Karttunen, L. (1976) : “Discourse referents”, J. D. McCawley (ed) *Syntax and Semantics 7. Notes from the Linguistic Underground*, Academic Press.
- Kleiber, G. (1991) : “Du nom propre non modifié au nom propre modifié. : le cas de la détermination des noms propres par l’adjectif démonstratif”, *Langue française* 92, 82-104.
- Langacker, R. W. (2001) : “Discourse in cognitive grammar”, *Cognitive Linguistics* 1, 143-188.
- Lewis, D. (1979) : “Score keeping in a language game”, *Journal of Philosophical Logic* 8, 339-359.
- Nash-Webber, B. L. (1977) : “Anaphora : A cross-disciplinary survey”, *Technical Report of Center for Study of Reading* 31, Univ. of Illinois.
- Õim, H. (1973) : “On the semantic treatment of predicative expressions”, Kiefer, F. & N. Ruwet (eds) *Generative Grammar in Europe*, Reidel.
- Olsson-Jonasson, K. (1984) : “A propos de la distinction spécifique / non spécifique des syntagmes nominaux indéfinis”, G. Kleiber (ed) *Recherches pragma-sémantiques*, Klincksieck
- Rosch, E. (1978) : “Principles of categorization”, Rosch, E. & B. B. Llyod (eds) *Cognition and Categorization*, Lawrence Erlbaum Association.
- Webber, B. L. (1978) : *A Formal Approach to Discourse Anaphora*, Ph.D. thesis, Harvard University.
- 井元秀剛 (2000) 「指示性と周知性の関連について — 『あの N』 と ce N をめぐる対照言語学的考察」、『フランス語学研究』 34, 14-26.
- 小田涼 (2003) 「周知の指示形容詞をめぐって」、『フランス語学研究』 37, 34-47.
- 金水敏, 岡崎友子, 曹美庚 (2002) : 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究 — 日本語・韓国語・トルコ語」, 生越直樹編『シリーズ言語科学4 対照言語学』, 217-248, 東京大学出版会.
- 堤良一 (2002) : 「文脈指示における指示詞の使い分けについて」, 『言語研究』 122, 45-78.
- 東郷雄二 (1991) 「L’anaphore, cet obscur objet de recherche. — フランス語の<指示形容詞 CE+名詞句> 照応」, 『人文』 (京都大学教養部紀要) 37, 92-112.
- 東郷雄二 (1999) 「談話モデルと指示 — 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」, 『京都大学総合人間学部紀要』 第6巻, 35-46. (<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/discourse.pdf>)
- 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」, 『京都大学総合人間学部紀要』 第7巻, 27-46. (<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/discourse.kosoa.pdf>)
- 東郷雄二 (2001) 「定名詞句の『現場指示的用法』について」, 『京都大学総合人間学部紀要』 第8巻, 1-17. (<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/defnpexo.pdf>)

- 東郷雄二 (2002) 「不定名詞句の指示と談話モデル」、『談話処理における照応過程の研究』(科学研究費成果報告書 研究代表者東郷雄二)、1-35. (<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/indefinite.pdf>)
- 春木仁孝 (1990) 「現代フランス語の『周知の指示形容詞』について」、『言語文化研究』16, 77-95.
- 春木仁孝 (2012) 「指示形容詞の概念指示用法について 『周知の指示形容詞』を中心に」、坂原茂編『フランス語学の最前線1』、ひつじ書房、79-114.